

ことばの迷い道

愛すべき「のんべえ」

うえはた ふみ
上畑 史

民博 機関研究員

東欧、バルカン半島に位置するセルビアの大衆音楽に、こんな歌詞の楽曲がある。

喜び悲しみ／人はなぜ酒を飲むのか／俺は早い時間から飲む／それがメラクなのさ／一生ドンチャン騒ぎで他のことは知らない／俺はワインと女を楽しむ奴だよ／だから家がなくて通りで寝るのさ（「メラクリヤ」ベキ・ベキッチ）

今夜、わたしの大切な人が最高に盛り上がるの／酒場で朝までドンチャン騒ぎ／彼はメラクのために悪魔に魂を売るでしょう／そんな豪快な彼を愛しているわ（「豪快な人」アナ・ベクター）

こうした歌詞の文脈において「メラク (Mezak)」は、「快樂」とでも訳せるだろうか。だが、きっとセルビア人は納得しない。メラクはセルビア人にとってさえ説明が容易でない情動的な単語である。ある者は「窮屈な靴を履いて歩き回り、帰宅して靴を脱ぐ瞬間」に例え、また別の者は「バルカン流の淫靡」と換言する。

つまり、メラクとは苦悩やしがらみから解放され、安堵や幸福感に満たされる感覚を表現することばなのである。したがって、歌詞に登場する人物たちを単なる「のんべえ」とみなすのは正しくない。彼らの人生や生活の背後に悲しみが潜んでいることを、聴衆はメラクということばによって感じるのである。さて、セルビア人がメラクの境地に至るには前提となる条件がある。酒と音楽である。そのためメラクは、これらを同時に楽しむことができるカフアナ（酒場）で生じる感覚だと考えられている。酒と生演

奏（ロマの音楽家が多い）、そしてセルビア料理も提供されるカフアナは、一九世紀に誕生し、民俗文化のひとつとなって、現代の人びとにも親しまれている。近年ではナイトクラブ（セルビア語でクルブ）とカフアナを融合した「クルバナ」という業態すら登場し、若者を魅了している。

カフアナでメラクの真つ最中にある人は一目瞭然である。感極まってグラスを床に投げつけ割ったり、男女問わず天を仰ぐように両手を広げ、音楽に陶酔していたりするからである。メラクを盛り上げる音楽としては、セルビア南部に顕著な、トルコ風のオリエンタルな音楽が最適とされる。なお、そうした音楽や、メラクやカフアナといった語彙は、セルビアが一九世紀以前に経験したオスマン帝国による支配に由来する。

同帝国の支配を脱した一九世紀後期、あらゆる局面で西洋化が推進されるなか、オリエンタルな文化を温存したのがカフアナであり、その古風な佇まいゆえ、セルビアらしい空間とみなされてきた。そんなカフアナで繰り返され慣例化したメラクに起因する行為は、セルビア人らしい心性の発露として理解されている。

大酒を飲み、演奏に合わせて歌ったり、泣いたり、わたしは未経験だがグラスを割ったり……。だが、その翌日は意外にも清々しい。むしろそのとき演奏されていた楽曲が一生の宝物になったりする。なぜならメラクに浸る人は、迷惑な「のんべえ」ではなく、セルビア人らしい「愛すべき人」として受け入れられるからだ。引用した二曲目の歌詞のなかで、女性が「彼を愛しているわ」と語るの、そういうことなのである。